黒い神

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い神

【Ｎコード】
Ｎ２６５０Ｚ

【作者名】
骨休め

【あらすじ】
自覚しないまま自殺という行為を繰り返してしまう早川美耶。密かに心配した兄が連れてきたのは、古代史の暗部を熟知する少年だった。美耶の中にいる、彼女を破滅に導こうとする者の正体を知るために、奮闘する彼らが巻き込まれる事件の数々。目標は週間更新。

プロローグ（前書き）

オオツキ教授シリーズのキャラクターと世界観を使い回した、全然別のストーリーです。以前の話を好んでくださった方にはオススメできません。

プロローグ

来年の春に仏教大学を卒業する予定の崇志(たかし)が、正月、久々に実家に帰ってきた。高校までスポーツマンとして鳴らした頑強な体格に、気の早い坊主頭。母親から順番に、父親、妹の美耶(みや)まで、

「なんか怖いわよ、あんた」

「坊さんには見えんな」

「ヤ〇ザ…」

捗々(はかばか)しくない感想を述べる。

「やかましい」

一蹴してから、玄関先にどっかりと荷物を下ろす彼。

父親が普通のサラリーマン、母親は専業主婦という、ごくごく一般的な家庭に育った崇志が僧門に入ることを目指したのは、単なる気まぐれだったと、美耶は聞いていた。

「愛読書が孔〇王だったんだ」

と真言を駆使して魔物退治をする漫画を引き合いに出して茶化す言葉を、鵜呑みにしたわけではないけれど、元々の深慮のない性格から、まあ、真実もそんなところなんだろうと思っていた。

「お兄ちゃんは気楽でいいよね…」

自身の根暗な性格から、友達付き合いでつまずき、高校で登校と不登校を繰り返している美耶にとって、崇志は、目障りでもあり、また尊敬の対象でもあった。普通に学校に通えるという理由だけでなく、彼の評判が、親、友だち、かつての恩師たちに高評価されているからである。

「あたし…なんで、妹なのに、お兄ちゃんと同じようにできないのかなあ…」

以前、コンプレックスをそのままぶつけたときに、兄からはこんな言葉が返ってきた。

「お前、妹じゃねえもん」
そこまで存在を否定されると、自信のなさにますます磨きがかかるものである。

靴を脱ぎ、玄関を上がりかけてから、崇志は思い出したように、外に顔を向けた。
「おい、入ってこいよ」
え、という表情をした崇志以外の3人の前に、おとなしそうな、そして利発そうな雰囲気を持った少年が姿を見せた。
「紹介してくれないと、肩身が狭いじゃないですか」
苦笑しながら頭を掻く彼の風貌は、高校生の域を出ていないような稚(わか)さを持っている。
繊細な顔立ちに線の細い体躯を見咎めて、美耶は慌てて母親の後ろに隠れた。この手の男子に免疫がない。免疫のないタイプに近寄ることは苦手だった。
「あ、こいつ、大月晴彦(おおつきはるひこ)っていうの。正月の間、うちに泊めるからよろしく」
事も無げに言う崇志に、母親が、
「先に言っときなさいよ、そういうことは」
と叱った。そして晴彦のほうを見て、
「とりあえず上がってくださいな」
と促す。礼儀正しく一礼した少年は、脱いだ靴を揃えながら、崇志に向かって、
「信じられん。連絡してなかったの、崇志兄?」
と毒づいた。

晴彦を迎えるために、母親と客間を片付けながら、美耶は大きな溜息をついた。
「普通、急に来客があったら、断るもんじゃないの?」
問題の客人は上階の崇志の部屋に引っ込んでいるから、聞かれる心

配はない。
「崇志のお客さんなんだからいいじゃない」
母親は笑みを浮かべてそう答える。絶大な信頼のなせる技だ。
「だって…よりによって男の子なんて…」
ぶつぶつと文句を呟く美耶に掃除機を渡しながら、
「女の子連れてきたら、もっと問題だったと思わない？」
と母はつれなく言った。しかたなく、歓迎しない来訪者のために労働をする。

ひととおりの手伝いを済ませ、夕食までの時間を自室で過ごしていた美耶の耳に、ノックの音が聞こえた。
「俺。ちょっと出てきて」
問答無用の兄の誘いに、しぶしぶドアを開ける。
「何？あたし、いま、宿題中…」
「嘘つけ」
広げていたティーンズ用の雑誌を即座に見破られた。
「…宿題はしてないけど、お兄ちゃんの用事をしてあげる気はないからね」
バツの悪さを隠して、そう牽制すると、
「んじゃ『晴彦のために』近所を案内してやって」
と告げられた。
目が点になる。
「はい？あたしが？」
非難を含んで確認すると、ガラの悪くなった兄は、当たり前のように頷いた。
「そう。俺、いまから一寝入りすっから」
因果関係がわからない。崇志の昼寝と、
「あたしがなんで」
案内役に抜擢させなければならないのか。
「暇そうじゃん」

簡潔な理由だった。
　さらに文句を重ねようとした美耶を遮って、マイペースな兄は晴彦を大声で呼んだ。
「おい、美耶がいいって」
人懐っこい目をした少年が、隣の崇志の部屋から顔を出し、
「よろしくお願いします」
と丁寧に依頼した。

　黄昏時の住宅街を抜け、木枯らしの吹き荒れる田園の傍を行く。西にそびえる丘の向こうから、残照が、掌のような赤い痕跡を伸ばした。
「…寒いだけなんだけど」
小声で愚痴る美耶の横で、晴彦は、彼女より若干高い背丈を姿勢よく維持したまま、止まった。
「いいとこだね」
「寒いだけなんだけど」
もう一度繰り返し、美耶は、ポケットに突っ込んだ手を出して、マフラーの位置を整えた。
「それだけ重装備してんのに？」
呆れたふうもなく、他意のない無邪気な笑顔を振りまきながら、少年は、自分の上着から使い捨てカイロを取り出して、渡す。
「根本的に解決になってない。帰りたいって言ってるんです」
俯いたまま口を尖らせると、
「あの丘のほうに行きたい」
と完全に提案を無視された。溜息をついて、見た目に反して図々しい来客のために、また歩を進める。

　丘は自然公園として整備されている。麓には１０台ほどのスペースを持つ駐車場があり、そこから、遊歩道が雑木林の中に伸びていた。すでに辺りは夜に近いほど暗い。

「こんな時間から中に入るのは嫌だよ」
と釘を刺すと、
「いいよ。ここまでで」
と答えが返った。じゃあ何しに来たのよ、こんなとこまで、の文句は飲み込んだ。言えば、これ以上の進行を誘うようなものだ。
晴彦は、しばらく思慮深い顔で遊歩道の先を見ていたが、不意に美耶のほうに振り向いた。トーンを落とした声で語りかける。
「崇志兄に聞いたんだけど、この山って自殺者多いんだってね」
どきん、と心臓が跳ねた。慌てて晴彦から距離を取り、取り繕う。
「そ、そうなの？聞いたことない」
「美耶ちゃんは、もうそんなことしないだろ」
「しっ…」
反論の途中でつぐむ言葉。沈黙。溜息。また沈黙。

駐車場の手前に配置された、木製の柵に腰をかける。同じく隣に落ち着いた少年に、顔を向けないまま、美耶は告白した。
「最近は落ち着いてるの…。中学生の時はひどかったけど…。お兄ちゃんが見つけてくれた頃がピークかな…」
「崇志兄が、オレに会うたびに美耶ちゃんの話するんだよ。ほら、同じ高校生だからさ。多感な時期っつっても、習慣みたいに繰り返すのはおかしいって。オレもそう思う」
晴彦も美耶を見ていないようだった。前方に真っ直ぐに飛ぶ声が、美耶への直接の攻撃を回避してくれる。
「わかってる。自分でもおかしいと思うの。でも、生きてるのがすごく怖いときがある…。…じゃないね。生きてるのが間違ってるって思うときがあるんだ…」
あの衝動をどうやって説明したらいいかわからない。自分が自分ではないような、生への執着が罪悪であると断定されてしまうような。
また沈黙が訪れた。あと。
晴彦が、頭を掻きながら、苦笑した。

「ジサイの恨みって強力だなあ」
「ジサイ？」
聞き返す美耶に向き直って、少年は説いた。
「美耶ちゃん、自分で覚えてないかな。普段の生活の中で、ときどき、別人みたいになるらしいよ。自分がなぜジサイに選ばれたのかって泣き喚くんだって」
情緒不安定になって、突然泣いたりするのは記憶していた。でも。
「…ジサイって何？」
そのキーワードに覚えはない。
「ジサイってのはさ…別の言葉で言えば、巫女（シャーマン）」
美耶と歳の変わらないはずの晴彦は、一般的でない知識をすらすらと解いた。
「『持つ』に『衰弱の衰』と書いて『持衰（じさい）』。じすい、とも言うけどね。邪馬台国以前から日本にあった職業で、…えっと…、現代で言うと、生贄みたいな立場」
「え…」
『生贄』の単語に、確かに反応する恐怖があった。
「それが、あたしとどう関わるの…？」
聞いてはみたが、答えはもう出ている気がした。
「オレにもそこはよくわからない。１８００年も前の存在が、美耶ちゃん憑依するとは思えないし」
首を傾げる晴彦に、真実を知ってもらいたい衝動が湧いた。
「あたし…たぶん、生まれ変わりなの」
そういうと、彼は、
「あ、そっち」
と大して驚きもしなかった。
「自覚あるんだ？」
と聞き返されて、
「なんとなく」
と答える。

持衰の名前の出てくるもっとも有名な書物は『魏志倭人伝』だろうね、と少年は言った。
「魏志倭人伝…は知ってる？」
現役高校生がまさか知らないことはないだろう、でももしかして、という口調で尋ねる晴彦に、美耶は、
「邪馬台国の説明本」
と答えた。
「あははっ」
屈託のない笑い声が響く。
「それも有名だけど、当時の日本の習俗を表記した書物としての価値のほうが高いんだ。邪馬台国の記述は信憑性に欠けるから」
そういえば、邪馬台国の位置が未だに特定されないのは、魏志倭人伝の注釈が間違っているからだと、美耶も聞いたことがある。
魏志倭人伝は、古代の日本人の習慣を記した書物、その中に『持衰』の項目がある、ということか。
さっき、晴彦は『持衰はシャーマンのことだ』と言った。シャーマン…。
シャーマンと言えば代表格は卑弥呼だ。…というぐらいの知識は美耶にもあった。鬼道という、一種の超能力を使って、政治を行った邪馬台国の女王。ということは…。
「…え、じゃあ、あたし、卑弥呼の生まれ変わりなの？」
驚く美耶に、
「壮大な勘違い」
と晴彦は言い捨てた。
「その言い方、ムカつく」
不慣れだった異性への壁がいつの間にか取り払われていた。頬を膨らませると、賢明な少年はまた笑った。
「婆ちゃんの卑弥呼よか美耶ちゃんのほうが可愛いじゃん」
膨れた顔が見る見る赤くなる。

「話を戻すけど、魏志倭人伝の中の持衰の項目は、こんなふうに書かれてるんだ」
晴彦は幾分か真面目な態度を取り戻して、言った。
「古代人が航海に出るときは、厄除けに持衰が選ばれる。持衰はすべての厄を身に受けるという意味から、体を清潔にすることもできず、肉食は禁止。船が無事に帰ってくれれば褒美として財産が与えられるが、船に災難があれば殺される」
『災難があれば殺される』。その言葉が美耶の頭にリピートした。
「あたし…殺された持衰の生まれ変わりなのかな…」
「だったとしても、生まれ変わった肉体まで壊そうとするのは、度を越してるんじゃないの？」
少年の言い分にも頷けた。
「だったら…あたしの中にいるのは…普通の持衰じゃないの？」
油断すると頭をもたげてくるドス黒い存在の正体を知りたい、と思った。
「イレギュラーなケースは知らないけど、想像することはできるよ。怨霊とか呪いとかって、オレの中じゃメジャーな世界だから」
知りたきゃ協力する、と、博識の彼は請け負った。

日が暮れきって真っ暗になった夜道を、２人で帰る。
「ねえ…もしかして、今回来てくれたのって…」
崇志から自分の悪癖を聞いた晴彦の善意なのではないかと、美耶が尋ねると、
「半分は。でもごめん。半分は興味」
と少年は苦笑した。
「いいよ、それで」
赤の他人が気にかけてくれる。それだけでなんとなく心強かった。
「ところで、大月くんって何年生なの？」
同じ高校生であることはわかったけど、態度や容姿からは年齢が測

れない。
「ハルでいいよ。3年生」
「あ、歳上なんだ」
2年生の美耶は、ちょっと意外に思いながらも、覗きみた横顔が思いのほか大人びていたことで、納得した。そして、気づく。
「…受験生？」
「それ、言うなって」
晴彦は、困った顔で、また頭を掻いた。

稲荷天の報い　１（前書き）

内容が複雑でマニアックなので、１話２，０００文字以内でアップしていこうと思います。

稲荷天の報い　1

夕食はひどく豪勢だった。帰宅してから、一度、自室に戻り、部屋着に着替えてきた美耶は、居間の座卓で、崇志と父親がすでに日本酒を煽っている席に着いた。
「いつもはお父さんと食の細い美耶と3人でしょ。こういう賑やかなのがいいわよね」
母親の上機嫌は、大人数のせいばかりではない。後ろから晴彦が大皿を抱えて手伝っている。
崇志から借り受けたらしいダボついたジャージを着込んで、ますます華奢に見える少年に、美耶はなんとなく目を奪われた。よく働き、よく喋る。総じてコミュニケーション能力が高い彼に、人望のある兄とは別の意味で憧憬を抱く。
「…お兄ちゃん、どうやってあの人と知り合いになれたの？」
無意識に呟くと、崇志は2杯目の酒を手酌で注ぎながら、
「大学の非常勤講師の息子なんだよ。講師（せんせい）の講義が面白いんで、自宅まで押しかけて勉強させてもらってるうちに、懐かれた」
と嬉しくもなさそうに説明した。
「ふうん」
なぜお兄ちゃんなんかに懐くのかな、と心の中で疑問視すると、
「なんで俺なんかに懐くのか、って、いま思っただろ」
感能力（テレパス）者ばりの推察力で斬り込まれた。慌てて首を振る。
母親の声が台所から飛んだ。
「美耶、お客さんにやらせっぱなしじゃ駄目じゃない」
同時に晴彦からフォローが聞こえた。
「ええですよ。散歩に付き合わしたし」
腰を浮かしかけ、また座った美耶は、
「関西弁なんだ」
と密かに微笑んだ。崇志の大学は京都にある。考えてみれば当たり

前か。

「え、方言出てた？」
美耶の隣に座って箸を握った晴彦は、その指摘に眉を寄せた。
「あちゃあ…。気い抜くと駄目だね、やっぱ」
「京都弁嫌いなの？」
柔らかい言い回しが彼らしくていいなと思っていた美耶は、残念に思って問い質す。
「嫌いってわけじゃないけど、大学は他所に行こうと思ってるから、なるべく標準語で喋りたい」
「あら。関西の人って関西弁を直さないって聞いたけど」
母親の追及に、
「それは大阪です」
とやっぱり否定する。
妙なこだわりを見せる彼の顔は、真面目に反省しているよう。睫毛の長い、くっきりとした二重の目は、表情を余すところなく伝えてくれる。整いすぎていて神経質にさえ見えた造作は、苦痛に歪んだとたんに人間らしさを強く浮かべた。
「…あの…美耶ちゃん…あんまりじっと見られると、飯食いにくいんだけど…」
どうやら苦痛を与えていたのは美耶自身だったようだ。
「ご、ごめん」
急いで目を逸らし、自分も箸を取る。

食が細いと母親は言ったが、美耶は小食なわけじゃない。食べている最中に罪悪感が募って、一度には量がこなせないのだ。いまも自分の中の強制的な力に負けて、また箸を下ろす。
「あら。もう終わり？」
母親が慣れた様子で美耶の左隣の席から移動した。
「うん。またあとで食べる」

言い置いて、そのまま、広くなったスペースに転がる。
いつもなら一時的に寝入ってしまうのだが、見下ろす晴彦と目が合った。
「あ、えっと…」
行儀悪いね、と苦笑いしながら、顔を隠すつもりで横を向く。
「いろいろ難儀だなあ」
彼から慰めの声が漏れた。
「うん」
なんだか惨めになって、長い髪の毛で本格的に表情を覆った。

夢うつつの頭に家族の会話が入ってくる。
「美耶はよくなってるのか？」
これは崇志。
「病院の薬は減らしてもらったわ。あ、ごめんなさいね。こんな話を聞かせちゃって」
と母。
「いいですよ。崇志兄から事情は聞いてます」
晴彦の声もする。
あたし、精神病じゃない。心の中でそう訴えた。でも、現実には統合失調症の診断が出ている。精神科というのは恐ろしいもので、本人が絶対に正常だと訴えても、何らかの病名を課してくる。いったん診断が下されたら、もう覆せない。
再度、崇志が言った。
「治ってきてるって判断はどこでされたんだ？俺には、まだ、普通に見えないが」
「暴れることと、夜中に徘徊することがなくなったの。だからだと思う」
「話すこともまともになってきたぞ。そう思わんか？」
父親の声が割り込んだ。
「そうかあ？」

兄、完全否定。失礼だなあ。美耶は密かに憤慨する。
「オレが喋った限りでは、美耶ちゃんは正常でした」
晴彦のフォローには内心で小躍りする。
あたしの中には別人がいるの。美耶がそう説明したとき、精神科医は言った。そういうふうに思う病気なんだよ、と。だけど晴彦は、『持衰』という存在が古代に実際にいたんだ、と教えてくれた。だから信じる。あたしの中には別人がいる、と。

稲荷天の報い　2

娘が完全に寝入ったのを見届けてから、母親は、声を潜めて言い出した。
「あんたがお坊さんになるつもりだから言うけど、実はね、美耶の病気って、狐憑きっていうもんじゃないかと思うの」
崇志は父親に注いでいた酒を止めて、
「…ふうん」
と真顔になる。
「なんで？」
「いま住んでるここ、宅地になる前は山だったんですって。それで、頂上には大きな稲荷神社があったらしいのよ」
崇志から一升瓶を受け取って、母親は父親のグラスを満たした。
「ご本尊は京都の伏見稲荷から…ぶ…分社…された由緒あるものだったらしいけど、山を崩して移転するときに丁寧に儀式をしなかったみたい。美耶がよく行くあの丘の公園、あそこも境内の一部だったから、未だに自殺が起こったりするの」
『分社』じゃなくて『分祀』な、と崇志は訂正して、さらに『移転』じゃなくて『遷座』な、と答えてから、続けた。
「それで？」
「だからね、私とお父さんで、美耶を連れて、伏見稲荷までお参りに行こうと思うんだけど、あんたも来てくれないかしら」
母親の期待に輝く目をかいくぐって、未来の僧侶は、軽く首を振った。
「狐憑きなんて実際にはねえよ」
対面の晴彦が吹き出す。
「坊さんの台詞じゃないよ、それ。飯のタネ否定するの、崇志兄？」
「酔ってるから正直なんだよ」
崇志は顔をしかめてから、空にしたグラスを遠ざけた。

「あんたは美耶を治したくないの？」
母親が呆れる。
沈黙の中、父親も含めた４人の視線を注がれた美耶は、まったく動じる気配もなく、熟睡している。
晴彦が話題を引き継いだ。
「…狐憑きをする『狐』っていうのは、伏見稲荷の狐とは違います」
「え、そうなの？でも…」
驚いて反論しかける母親を制して、少年は知識欲で満たされている瞳を向けた。
「祟りを起こす稲荷神と認識されているのは、本来の神さんの使いのほうじゃなく、神仏習合で統合された仏教の荼枳尼天（だきに）のほうです」
場の空気の中に、果てしない？？？？？が飛び交った。
「つまり」
正座に正す晴彦の膝元で、無意識の美耶が身を任せるように寄り添ってきた。
「美耶ちゃんがこんなふうになっているのは、狐憑きじゃないってことだけは、ちゃんと説明できるんです」
少年の断言に、大の大人が説明を待つ。

稲荷天の報い　2（後書き）

※『遷座』は本来寺院の移転時に使われる言葉で、神社の場合は『遷宮』と言いますが、今日では遷宮というと伊勢神宮の『式年遷宮』に対して固有で使われることが多いため、混乱を避けるために、常用されている表現を使いました。

稲荷天の報い　3

狐が神格を持った歴史は古い。
「日本における公式な歴史書の最も古いものは古事記と日本書紀なんですが、８世紀に編纂された日本書紀には、すでに神の使いとして狐の存在が書かれています」
晴彦は用意されたメモに『御饌津神　みけつかみ』と書いた。
「稲荷さんっていうと、たぶん、狐の神様を想像されると思うんですけど、実際のお稲荷さんは、このミケツカミのことです。狐はその眷属（けんぞく）…お使いをする役目の動物です」
「そうなの？神様じゃないんだ」
母親は意外そうにメモを覗き込んだ。父親は遠目で話を聞いている。
「神様ではないけど、神様の使いだから、それに準じた地位は持ってます。稲荷さんにお参りするときに、油揚げをお供えしませんか？　油揚げはミケツカミの好物じゃなくて狐の好物です。だから、みんな、本来の神様じゃなくて眷属にお参りしちゃってるんですよ」
笑う晴彦に感心の声を漏らす母親。それを遮り、崇志が、
「荼枳尼天」
と先を促した。
「はいはい。崇志兄はせっかちやな」
一時的に、また京都弁に戻って、晴彦は『神仏習合　神仏分離』とメモ書きを足した。
「いまはお寺さんと神社（かみ）さんは別々でしょ。でも、最初は明確に分かれてなかったんですよ。それを明治政府が法令で定めて分けたんです。そのことを神仏分離って言います」
「へえ」
そろそろ話についてこられなくなったのか、母親は言葉少なに合いの手を入れた。
「だけど、その法令後も分離しなかったり、また習合したりする寺

院と神社があったりして、お寺なのに中に神社を持ってるところがあるんです。稲荷神社の多くは、だから、仏教の仏さんである荼枳尼天を祀(まつ)ってます」
顔を上げて、崇志兄は理解できてるか、と問う少年に、崇志は軽く頭を下げた。
「つまり、荼枳尼天を祀ってる稲荷神社は、神仏分離がなされていない、イレギュラーな信仰だってことだろ。本来の稲荷神社はミケツカミを祭ったものが純正品だと」
「そうそう、そういうこと」
完結にまとめられた事実に、晴彦はほっと安堵の表情を浮かべた。
「伏見稲荷は純正品のミケツカミを祭っています」
やっと話が伏見稲荷まで戻ってきたことに、今度は母親のほうが安心したようだった。
「よかった。ハルくんは難しいこと知ってるのね。いまの高校ではそんなこと勉強するの？」
「それやったら、オレ、テストの成績一人勝ちしてます」
晴彦は頭を掻きながら苦笑いする。
「母さん、少し黙ってなさい」
どうやら話を脱線させる元は母親にあるらしいと気づいた父親から、注意が飛んだ。

稲荷天の報い　4

狐憑きを起こすのは荼枳尼天のほう、と、晴彦はもう一度繰り返した。
「仏のくせに祟りをもたらすなんざ、怖いおばさんだ」
荼吉尼天が女神であることを聞いた崇志が、そう茶々を入れる。
「そういうこと言う崇志兄から、まず祟られるんじゃないの？」
少年は笑いながら続ける。
「崇志兄が言うように、仏教の仏さんは、本来、『救済』の目的で作られていますから、祟りません。ただ、位の低い『天』や『王』の中には、モデルにされたインドの神の性格を濃く残してるもんもあるんです。荼吉尼天のモデルは、インド神話の殺戮の神、ダーキニーです」
「いやあね。そんな人が神様なんて」
との母親のコメントに、
「神じゃなくて仏」
と、また細かいことを突っ込む僧侶志望。晴彦はやり取りを無視した。
「そんな怖い荼吉尼天に『祟り神』…つまり、お祀りしないと祟る、という触れ込みがついたのは自然のことだったんだと思います。そこから、同一視されたお稲荷さんも『祟る』と言われるようになるのは当たり前。本来の稲荷神が穏やかな農耕の神さんであったにもかかわらず、祟り神としての側面を持ったのは、単なる勘違いなんです」
へえ、と納得しかけた母親と違い、父親が疑問を挟んだ。
「そもそも、なぜ稲荷神社に荼吉尼天が祀られるようになったんだね？」
「荼吉尼天の眷属も狐なんですよ。だから、ミケツカミと同じ存在だと思われたんでしょうね。日本の神さんと仏さんは、共にインド

や中国の思想を強く受け継いでます。同じものなのに名前が違って祭られるってことがよくありますから」
簡潔に答える晴彦に、父親も溜飲を下げた。

稲荷天の報い　４（後書き）

※『天』『王』の説明で仏に位があると書きましたが、それぞれの信仰において必要なのは、位というより仏の性格のほうです。『天』や『王』を祭っているからといって卑下するのはやめましょう。ちなみに最高位は『如来』です。

稲荷天の報い　5

母親が片付けに台所へと引っ込んだあと、崇志は、父親の酒をまだ足しながら、小声で補足した。
「祟りっていうのは、実はもっと混沌とした感覚でね。だから、美耶が狐に祟られてる、という考えも、晴彦が言うほど完全には切り捨てられないんだ」
「すみません」
対面の少年は、頭を掻きながら、でも悪びれずに応える。
「だけど、美耶ちゃんのケースは、あんまり複雑にしないほうがいいと思うんです。美耶ちゃん自身が『憑依』や『転生』に過敏になってる。狐に憑かれてるなんて言ったら、それこそ、その気になっちゃうんじゃないかと思って」
「狐憑きって呼ばれる現象の多くは、単なるノイローゼだからな」
崇志がオチをつけるのを聞いて、父親は低く笑って、言った。
「お前、そんなドライな考え方で坊さんになれるのか？」
「なるよ」
断言する息子に、また笑いが漏れる。
「まあ、好きにしろ」

美耶がぼんやりとした頭で起き上がる頃には、食卓には晴彦しか残っていなかった。
「お腹すいた…。晩御飯の続きにする」
もそもそと箸を取る少女に、少年は自愛に満ちた目を向ける。
「さっきさ…、散歩から帰ってくるとき、オレ、美耶ちゃんに、『興味半分』って言ったじゃん」
話しかける晴彦に、箸を口に含んだまま、美耶は視線を当てた。
「うん」
「あれ、撤回する。もうちょっと本気で付き合う」

「……」
なんでそんな気になってくれたんだろ…。わけがわからなかった。
でも。
美耶は頬を緩ませて、
「うん」
ともう一度頷いた。
「がんばろうな」
少年の励ましに、
「うん！」
と三度目の返事を元気に返す。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2650z/

黒い神

2011年12月11日19時46分発行